

元好問「論詩三十首」とその周邊

高橋文治

劉祁『歸潛志』卷八には、金朝正大年間（一二三四～一二三一）の初、當時翰林の座主であった閑閑公趙秉文が詩會を主催し、同じく翰林にあつた人々を集めてはさかんに詩を應酬しあつたとの記述が見える。そこに録された詩句をいくつか見るならば、〈古瓶蠟梅〉と題して趙秉文が

苔華吐碧龍文澀 燭淚痕疎鴈字橫

と詠じたのに對し、潘希孟という人物が

命薄從教官燭冷 眼明猶喜跡雙清

と應じ、また、南京（開封）郊外・極目亭に於ける九日の詩會では、趙が

魏國河山殘照在 梁王樓殿野花開

と詠じたのに對し、雷淵が

千古雄豪幾人在 百年懷抱此時開

と應じたのである。この二例を見れば明らかな如く、翰林の詩會で應酬された詩の多くは、和韻・次韻の詩であり、場合によっては分韻の作だつたと思われる。そのことは、詩會に名を連ねたであろう

人達が集中的にとりあげられる『中州集』卷六を見ても容易に推察し得る所であるし、また、當時、和韻の名手として名を馳せたのが劉從益という人物であつたこと、これも同じく『中州集』『歸潛志』によつて確認することが可能なのである。

ところで、當時、新進の編修官として翰林にあつた元好問が、こうした詩會に同席したのは無論であつた。後年、翰林の面々が喪亂に落命した後、彼は當時を回顧して次のように詩會を記念することになつたのである。

往年在南都 往年 南都に在り

閑閑主文衡 閑閑 文衡を主る

九日登吹臺 九日 吹臺に登り

追隨盡名卿 追隨するは盡く名卿

酒酣公賦詩 酒酣にして公詩を賦す

揮灑筆不停 揮灑して筆停らず

我時最後來 我 時に最も後て來たり

四座頗爲傾 四座 頗か傾を爲す

今朝念存歿 今朝 存歿を念い

.....

壯心徒自驚 壯心 徒だ自ら驚くのみ (九日讀書山十首 第七首)

「九日讀書山」と題されるこの詩は、陶淵明「九日閑居」詩中の一聯「露漙暄風息、氣清天象明」の一字ずつを韻とし、五言古詩十首の連作としたものである。謂わば、一人ですべての分韻詩を詠じたとも謂える、元好問晩年の力作であったが、ここで極めて興味深いのは、

「九日讀書山」詩で分韻の様式を借りた彼が、當の詩會に於いては、こうした應酬形式をほとんど用いていなかったと思われる點である。

そもそも、元好問という詩人は次韻・分韻の作の極めて少ない作家である。今日傳えられる凡そ千三百六十餘首の詩業の中で、分韻の作は、前掲「九日讀書山」十首を含めても二十首程度、次韻の作に至っては、わずか十首程度しか残されていない。當時に於ける彼の詩名の高さと交際の廣さから見ても、これはある意味で特異な事柄と謂って過言ではないのだが、實は、これには確固たる理由があつたことと思われる。というのも、元好問はその處女作とも謂える「論詩三十首」の中で、和韻についてすでに次のように論じていたからである。

窘歩相仍死不前 窘歩相い仍りて死すとも前まず

唱酬無復見前賢 唱酬 復た前賢に見ゆる無し

縱橫正有凌雲筆 縱橫 正に凌雲の筆あるも

俯仰隨人亦可憐 俯仰して人に隨うは亦た憐む可し

この第二十一首は、すでに宗廷輔がそう解した如く、和韻について否定的は論を展開するものである。つまり彼は、同時代人(むしろ先輩)がさかんに用いた應酬様式を、「前賢に見ゆるなし」乃至、詩情の自然な流露をさまたげるといった理由から排除して、自身の作詩にあつても、極力この形式を避けていたことになるのである。正大年間初といえは元好問は三十四・五歳。若すぎる年齢ではなかつたが、

元好問「論詩三十首」とその周邊

太原・登封・三郷といった田舎から上京し、正大元年、趙秉文を座主とする宏詞科に及第したばかりの新進の編修官であつた。繁華の國都で趙等歷々にまじり、本来なら萎縮し、諸先輩の習慣に従つてしかるべき所を、元好問は満々たる自信を以てあくまで持論を堅持したのである。

また、「論詩三十首」という作品は、これに先だつこと六・七年前、實に二十八歳の折の作である。が、この年は、趙秉文の推挽を受け、彼が當時の文壇に登場した年でもあり、自身の持論を展開したこの作品が單なる偶然によつて生まれたのではないことを、明瞭に示していると思われる。彼は、當時の文壇を睥睨し、自身の詩の方向と役割とを已に明確に自覺していたのである。「樹を撼がす蚍蜉は自ら狂たるを覺ゆ、書生の技癢論量を愛す」(第三十首)とはいいいながら、これは、滿を持しての用意周到な登場となつたに違いない。つまり「論詩三十首」は、當時の文壇事情と深く關わりながら、同時代に向けて議論を發した、極めて時代色の強い作品と見て大過ないのである。

また、この作品を書くにあつて、議論の起源として彼が恐らく意識したと思われる過去の例を検討するならば、それは多く、北宋・特に東坡とその周邊の人々に求めることが可能である。たとえば、今話題とする第二十一首についていうならば、「和韻は古にあらず」とする彼の持論は、北宋の鄭厚に出るものと當時意識された筈であり、王若虛『滄南詩話』も次のように記述しているのである。

鄭厚云わく、「魏晉以來、詩を作りて倡和し、文を以て意を寓す。近世の倡和は皆其の韻に次す。復た眞詩有らず」と。

ここにいう「近世」が、東坡を中心とする詩友達を主に指したのであることは言う迄もない。だからこそ王若虛は、この引用に續いて次の

ように自説を展開したのである。

才識東坡の如きも、亦た波蕩してこれに従うを免れず。集中の次韻は三の一に幾し。……蘇公をしてこれ無からしめば、その古人を去ること何ぞ遠からんや。

したがって、和韻に對する元好問の態度とは、同時代人(趙秉文や王若虛)の立場や議論を背景としながら、東坡達の作詩態度を修正し、むしろ鄭厚の議論に與しようとするものであった。そしてこの場合、元好問が宋人の議論を下敷にしていた點にも、彼の詩論の時代的な特徴があると見てよい。というのも、東坡とその周邊の人々とは、金朝詩全體が終にその影響を拂拭し得なかつた、時代全體の教師だったからである。

本稿の結論を先に述べるならば、「論詩三十首」とは、同時代の詩壇がかかえた問題を彼なりに整理・修正しようとしたものに他ならぬ。またそれは、東坡の詩業をいかに繼承し、金朝詩の未來をどこに摸索し得るかという、限定された志向をもって書かれたものでもあった。

二

和韻を論じて「古にあらざ」とした遺山は、「論詩三十首」第二十八首で、「古雅、子美を將て親しむに難し」とも述べた如く、「古」という語を多用した作家であった。後に彼は、「東坡詩雅引」(文集卷三十三)という文章の中で

夫れ詩は、子瞻に至りてすら且つ近古たる能わすの恨みあり。後人の望む所無し。

と記述することにもなるのだが、この「近古」こそは、單に遺山の詩

論のみならず、金末の詩壇全體を鳥瞰する上で、要ともなり得る重要な語彙といつてよい。それは主に、當時の二大巨趙秉文と屏山李純甫(字は之純、屏山は號)が、この語を用いて論争し、時代の詩をリードしていたからに他ならない。遺山の詩論は、そうした土壤に生まれだした精華であったが、とすれば、この「近古」という語がいかなる文脈で用いられ、いかなる論争の焦點になったかを明らかにすることは、この場合極めて重要な作業と謂わねばならない。以後の論述を通じて明らかにしたいのは、金朝文學の置かれた困難な状況である。そして、同様の状況は恐らく南宋にもあった筈であり、以後の詩すべてが大なり小なり同様の問題をかかえ續けたと見て大過なからう。

趙秉文は、かつて「李天英に答ふるの書」(文集卷十九)の中で、次のように記述した。

東坡はまた、太白の豪と樂天の理を以て合して一と爲し、以て古人を高視するに足る。然れども亦た古人を廢する能わず。足下は、唐宋の詩人の得處を以て、能く俗を免ると雖も殊に風雅に乏しとす。過てり。所謂「風雅に近し」とは、豈に規規然として、晉宋の詞人の如く、同一の律を踏襲することならんや。「子厚は近古、退之は變古」というが若きは、此れ屏山の守株の論なり。僕の敢て知る所にあらず。

李天英という人物は、趙秉文からすれば無論後進の、趙よりもむしろ李屏山を師と慕った人である。彼に詩の添削をたのまれた趙は、作詩における自身の信條をまとめたこの手紙を送って彼を激励したのだが、手紙の行間に實際に託されたのは、後進への愛情や期待ではなく、痛烈な李屏山批判だったのである。

この手紙全體の内容を要約しておくことが便宜であらう。

古いにしよのすぐれた詩人達は、その性にしたがって様々なスタイルを開拓し、各々の方法で『詩經』の理想に近付こうとしたが、變革者として知られる韓愈の「進學解」ですら、東方朔「客難」の變であり、「南山詩」でさえ司馬相如「子虛賦」の餘であつた如く、それは必ずしも變革の歴史ではなく、あくまで古人の道にしたがい、傳統を繼承した結果なのである。今君は、前人の語を踏襲せず、獨自の發想と造語を旨としている。それも一奇ではあるが、詩を學ぶ者は、傳統にしたがつて、三百篇・離騷・文選・李杜・その他大儒の文・名理の文・詞人の文・高士の文など、あらゆる文體のあらゆる妙處を學ぶべきである。

李天英とは、このように、積極的な變革が詩の理想をもたらすとした人物らしい。これが、とりもなおさず師李屏山の姿勢であつたことは、原文の引用箇所を見ても明らかであろう。李屏山は、「子厚は近古・退之は變古というが若きは、屏山の守株の論なり」と趙が記述した如く、「近古」を守株として退け、韓愈の「變古」を奉じた人であつた。また、だからこそ趙は、「東坡も古人を廢す能わず」といい、韓愈「南山詩」を「子虛賦」の餘と論じたのであつた。このように、二人が立場を全く異にした以上、李天英という人物に對する評價も對蹠的なものになつたのは、言う迄もあるまい。李屏山が、「李賀死してより二百年、この作なし」と彼を激賞したのに對し、趙は單に次のように記述したにとどまつたのである。

長吉・盧全を合して一と爲すに過ぎず。未だ能く、故を以て新と爲し、俗を以て雅と爲すにあらず。吾が友に望む所にあらざるなり。

(客李天英)
(晉前掲)

趙にすれば、屏山一派は奇であつても雅ではなく、造語を多用する

その詩は、盧全・馬異を焼き直しただけの單なる怪異趣味と映じたに違ひない。これは、東坡とその門人達の奇や新を一應經驗した當時にあつては、一種のアナクロニスムというに他ならない。

ただ、ここで注意すべきは、屏山一派の詩が盧全の域に終始したにしても、彼等の理想はあくまで「俗を以て雅と爲し、故を以て新となして」、東坡の後を繼ぐことであつたと思われる點である。たとへば『歸潛志』は、彼の言を次のように傳えているのである。

李屏山、前輩中に於いて、ただ王子端庭筠を推すのみ。嘗て曰わく、「東坡變じて山谷、山谷變じて黃華、人及び難し」と。(卷十)

ここにいう王庭筠(字は子端・號は黃華)とは、金の章宗朝の文壇をリードした名士であり、李屏山・趙秉文の師として、當時の翰林に多大の影響を及ぼした人物であつたが、この人を評するにあつて、李屏山は「東坡變じて山谷、山谷變じて黃華」と論じたというから、彼の「變古の論」も徹底したものであつた。そして、黃華を東坡の後裔としたことで明らかになつて、李屏山は東坡の「變」(乃至「新」)を繼承しようとしたのであつて、盧全の奇怪を強いて襲おうとしたのではなかつたのである。

李屏山自らは、彼の信條を次のように記述している。

人心の同じからざること面の如し。その心聲、發して言と爲る。言中の理、これを文と謂う。文にして節あるもの、これを詩と爲す。

然れば則ち、詩は文の變なり。豈に定體あらんや。故に三百篇、什に定章なし。章に定句なし。句に定字なし。字に定音なし。大小長短、險易輕重、惟だ意の適く所。(『中州集』卷一、劉汲の條)

これは、「毛詩大序」や白居易「新樂府序」を襲いながら、詩の文體が、表現される感情(内容)の變化と常に一致していなければならぬ

ことを説くものである。その點から謂えば、恐らく東坡のいう

行雲流水の如く、初めより定質無く、但だ常に當に行くべき所に行き、常に止まらざる可からざる所に止まり、文理自然にして、姿態横生す。(東坡文集卷四 十六 答蘇民師書)

と同様の論を展開するものと思われるが、正にここに、彼が造語を多用し、雑言の古體詩を愛好して盧全に接近した原因があったのである。

一方、趙秉文は、東坡であれば新意を法度の中に出だし、妙理を豪放の外に奇す。(文獻通考卷六十 藝文四 蘇東坡詩集後)

や

詩は杜子美に至り……古今の變、天下の能事畢れり。(言異道子 論後前掲)

という語を選んだことであろう。彼の手紙(前掲)にいう「太白の豪と樂天の理とを以て、合して一と爲す」とは、前者の語を意識した表現と考えられるからであり、彼が晩年李杜の祖述につとめ、後者と同じ認識に至ったことは、色々な記述に明らかだからである。また、師王庭筠について、趙秉文は

王子端、才は固より高し。然れども、太いに名の使う所と爲りて、一聯一篇を出だす毎に、必ず時人の皆これを稱するを要す。故に止だこれ尖新たるのみ。(歸潛志 卷十)

と述べたとされるが、ここにいう「尖新(目新しき、ハイカラ)」が、屏山のいう「變」を、俗語を用いて悪く言い換えたものであったことは、恐らく論を待たない。つまり、趙秉文は、東坡の「變」を「尖新」として嫌ったのである。彼が前輩中で大いに評價したのは、やはり李杜の祖述につとめた師拓(一名尹無忌)・趙風(字は文孺)といった人物であったが、その師拓にいたっては

詩は蘇黃を學べば則ち卑猥なり。(歸潛志 卷八)

とまで評したとされる。彼が東坡を退けた理由がどこにあったか、何の記述もないものの、山谷とともに「蘇黃」と述べた點から見れば、まさにこの「尖新」の故であったこと、明らかであろう。

ただ、趙秉文等が東坡のすべてを排除したかと謂えば、實はそうではない。我々の見落してはならない重要なことは、趙秉文の「近古」・屏山の「變古」いづれにしても、すでに多少言及した如く、兩者がともに、東坡の詩業をいかに繼承發展させるかという極めて深刻な課題を擔って展開されたと思われる點である。「歸潛志」卷八は、二人の立場と互いの反目を要約して、次のように記述する。

李屏山は、文を作り一家を成そうとする後進に教えて、いつも次のように言つた。「別の道に轉じなければならぬ、人のあとから付いていってはだめだ」と。だから、李屏山は奇怪を喜んだが、散文は莊子・左傳・柳宗元・蘇東坡を出ることはなく、詩も盧全や李賀を出ることはなかった。晩年は楊萬里の詩を愛し、「彼の詩はいきいきとしていて、人の及ぶ所でない」といつた。一方、趙秉文は、詩文を作る後進に教えて次のように言つた。「文章というものは一つのスタイルにこだわってはいけぬ。時に奇古あり、時に平淡ありといった具合で、自由でなければならぬ」と。李屏山は私と趙の文を論じて次のようにいつた。「彼の文は才もあり、氣象もなかなか雄渾ではあるが、本筋とは無關係な餘計な點が色々ある(原文は「失支墮節」)。恐らく、東坡を學んで成らざる者であろう」と。一方、趙は私に語つて次のようにいつた。「李屏山の文は、結局の所一體にすぎない。詩はやみくもに行く、といった具合だ」と。また、趙の詩はよく古人の語を使った。それが一篇中に數句あるとい

うこともあって、この點が彼の詩の病弊であつた。李屏山は嘗て「閑閑集」に序して次のように記述した。「公の詩は往々にして李太白・白樂天の語あり、某輒ち能くこれを識る」と。また、次のようにも記述した。「公は、男子は人の唾を食わずと謂う。後に、當に之純(李屏山)・天英(李天英)とともに眞文字を爲すなるべし」と。これらは、趙の病をひそかにそしつたものである。

二人の應酬は、このようになかなか辛辣であつたが、特に注目すべきは、屏山のいう「失支墮節の處あるを免れず、蓋し、東坡を學びて成らざる者か」の一語であろう。そこには、傳統を尊重して「近古」の立場から東坡を見る人物が、いかなる陷穽に陥るか、的確に剔出されているといつて過言ではないからである。この一語は恐らく、東坡のいう

杜(甫)を學びて成らざるも、工たるを失わず。韓(愈)の才と陶の妙なくしてその詩を學べば、終に樂天となるのみ。(屏山詩題)

を意識した表現である。そしてこれは、實は東坡自身の姿でもあつたろう。東坡の詩に、古人の詩句と多くの典故が用いられていることは、時に「癡祭」とまで酷評される、謂わば惡僻であつたが、屏山のいう「公は往々にして李太白・白樂天の語あり」とは、趙秉文が東坡のこの點を模倣して、しかも未消化に終つてゐることを厳しく指摘するものである。しかも屏山は、「失支墮節」といい、それが東坡の如き自由闊達さではなく、缺點ともいえる冗長さのみをもたらしていることを、皮肉をこめて揶揄しているのである。傳統の尊重と巨人の模倣とが、時に平凡な發想と陳腐な詩句をもたらすのは、洋の東西を問わず、凡庸な才能の通例であらう。すなわちこれが、李屏山の「守株の論」なのである。

そして、こうした李屏山の批判に明らかな如く、趙秉文にとつても東坡とは、先ず繼承すべき巨大な詩人であつた。むしろ彼は、東坡の尊重した古人を學ぶことによつて、東坡を追體験しようとしたに他ならない。だからこそ彼は、和陶詩を書き、韋應物に次韻し、李杜の祖述につとめたのである。そもそも、「子厚は近古、退之は變古」といふ議論自體、東坡に端を發するものといつてよかつた。

詩格の變は退之より始まる。(詩人玉曆卷十五)

枯淡を貴ぶ所の者、其の外は枯にして中は膏に、淡なるに似て實は美なるを謂う。淵明・子厚の流は是なり。(東坡題跋卷二)

と述べて、柳宗元を陶淵明と比較したのも東坡の創見によるものであつた。つまり彼等は、東坡のもつた「近古」と「變古」という二つの志向を、それぞれデフォルメして別々に展開したのであつて、東坡を排除し、東坡の影の外で詩を書こうとしたのでは決してなかつた。彼等は、東坡に發し、東坡の論理を以て別天地を拓こうとしたに過ぎないのである。

したがつて、ここで一言附言しておくならば、元好問に至る金朝詩の流れとは、圖式的にいって、韓愈・東坡・山谷を發展繼承しようとする王子端・李屏山の「變古」の流れと、東坡から過去へ溯つて李杜・韋柳をたどらうとする趙夙・師拓・趙秉文の「近古」の流れの二つがあつたことになるだろう。そして、元好問が「杜甫以來この作なし」といふ趙秉文の激賞を受けて詩壇に登場した頃、李屏山は

詩はまた韓(愈)を喜ぶ。兼ねて黃魯直の新巧を好む。(論詩志卷八)

といわれる雷淵や、前掲の李天英といった人々を發掘しては文壇に送りだしていたのである。元好問の「論詩三十首」は、こうした氣運の

中で生まれ、この時代の詩論の、謂わば總覽のような觀を呈することになるのである。

三

こうした經緯から明らかなように、元好問の詩論は、先ず何より「近古」の立場をとるものである。彼が「近古」の論を最初に展開したのは、無論「論詩三十首」であったが、金末の詩壇の盛況は、この作以外にも論詩詩を生みだしており、詩を以て詩を論じたこの作品の様式を彼一人の功績に歸着させるのは、この場合必ずしも妥當ではない。「中州集」卷四周昂の條に、「讀陳後山詩」や「讀柳詩」と題される七絶があり、同卷六王若虛の條にも「漫賦四首」や「漫賦三首」と題される七絶の連作があるのがその例である。また、同卷九王敏夫の條には、「東巖元先生と同様に詩を論ず」という論詩詩があるのだが、この東巖先生とは、元徳明・すなわち元好問の實父なのであって、案外この邊に、彼の様式の淵源はあったかもしれないのである(ただ残念ながら、元徳明の論詩詩は現存しない)。

なお、「論詩三十首」の中から元徳明の影を求めるならば、恐らく次の一首をあげ得る。

出處殊途聽所安 出處途を殊にすれば安んずる所に聽さん
 山林何得賤衣冠 山林何ぞ衣冠を賤しむを得ん
 華歆一擲金隨重 華歆の一擲 金隨いて重んぜらる
 大是渠儂被眼護 大是は渠儂 眼に護かれしならん
 この第十四首は、『中州集』中の父の小傳にいう次の一節と、恐らく深い關わりにある。

累擧するも第せず、山水の間を放浪す。未だ管て、一日として飲酒

賦詩せずんばあらず。……先生の詩、彫飾を事とせず、清美圓熟にして、山林枯槁の氣なし。

隱士として山林にありながら、「枯槁の氣」をなして命を忘れることがあつてはならない、とするのが、この第十四首の説く所であろう。

陶潛避俗翁 陶潛 避俗の翁なるに
 未必能達道 未だ必ずしも能く道に達せず
 觀其著詩集 其の詩集を著したるを觀るに
 頗亦恨枯槁 頗る亦た枯槁を恨む (杜甫「讀史五首」第三首)
 としたのは杜甫でもあつたが、元好問は、そうした態度を、杜甫からよりもむしろ元徳明から學んだのではあるまいか。第十四首は、元徳明のいう、たとえ

直教隨牒去 直ちに牒に隨いて去か教めんとすれど
 也是挂冠時 也た是れ挂冠の時
 臺閣多新賦 臺閣 新賦多けれど
 山林有逸詩 山林も逸詩有り (元徳明「讀史」)

などを意識しながら、「道(道)を聞くに味し」とされる唐人の狷介をそのものであつた。またそれは、陸龜蒙を論じて「百年の孤憤竟に如何」と述べた第十九首などにも、恐らくあてはまることである。

そして、「論詩三十首」の展開する「近古」の論とは、第十四首や十九首が唐人の狷介を主題とした如く、主に「意」の繼承を重んじるものであつた。その點では、東坡・山谷など宋人が「理」に傾いたのと對照的であり、また、趙秉文の「近古」がどちらかといへば修辭面を中心とするのとも、趣きをやや異にする。郭紹虞氏は、元好問のこうした面を「唯心的」と要約された。「唯心」という用語の是非はとも

かく、元好問が繼承し學ぼうとしたのは、陶淵明・陳子昂・李杜・韋柳を貫く風骨の流れであり、「唯心的」とも謂える詩精神だったのである。そのことは、すでに諸家の説く所であるから細論は避けるが、ここではその例として、柳宗元を論じた次の一首を見ておく。柳宗元は、「近古」と「變古」の論をなす上で、この時代、要とも謂い得る位置にあった。元好問が「近古」の立場から柳詩を評價したことは言う迄もないが、この第二十首は、また同時に、元好問と東坡の關係をも證す重要な一首となり得るだろう。

謝客風容映古今 謝客の風容 古今に映す

發源誰似柳州深 發源 誰か柳州の深きに似ん

朱絃一拂遺音在 朱絃一拂 遺音在り

却是當年寂寞心 却是是れ 當年寂寞の心

ここにいる「朱絃一拂遺音在」とは、東坡のいう「織機を簡古に發し、至味を淡泊に寄す」(『東坡題跋』卷二)を換言したものに他あるまい。つまり、柳詩の淡泊と至味とをいうのである。また、「發源の深き」といい、「寂寞の心」というように、そうした至味は、柳宗元の詩情の精純さに發する、とするのが元好問の理解であった。後に彼は、「小亨集引」(文集卷三十六)という文章の中で

唐詩の、三百篇の後に絶出する所以の者は、本を知れるのみ。何をか本と謂う。誠、是れなり。

と記述することにもなるが、この「誠」こそは、「論詩三十首」を貫くモチーフであり、第二十首で柳宗元評價を支えた中心的價值基準でもあった。

なお、この第二十首は、柳宗元と謝靈運を比較するという極めてユニークな論法をとるものとして、翁方綱『石洲詩話』以來、時に論及

されてきたものである。しかしながら實情は、翁方綱のいかぶりとは異なり、この詩には基づく所がある。『東坡題跋』卷二に次のようない節があるからである。

柳子厚の詩に云わく、「鶴鳴いて楚山靜かなり」と。また云わく、「隱憂 永夜に倦む」と。東坡曰わく、子厚のこの詩、遠く靈運の上に出づと。

また、同じく『東坡題跋』卷二では、李杜・韋柳・司空圖を貫く高雅の流れを追いながら、黃子思という人の詩に及び、次のように云う。予嘗て聞けり、前輩はその詩(黃子思)を誦して、佳句妙語を得る毎に、反復すること數四、乃ちその謂う所を識ると。信なるかな、表聖(司空圖)の言。美は鹹酸の外に在るなり。以て一唱して三歎すべし。

この「一唱而三歎」が、遺山のいう「朱弦」と同様、『禮記』『樂記』の同一箇所を典故とすることは、改めて述べるまでもあるまい。無論、東坡のこの言は、直接には黃子思の詩をいうものであり、柳詩を論じるものとして援用すべきでは必ずしもない。しかしながら、彼の議論が韋柳にはじまり、司空圖を経て黃子思に及んだのは、そこに淡泊の流れを追ったからなのは明らかである。「信なるかな」以下の表現は、その淡泊の至味を總括的に敷衍したものであるであって、その點からすれば、柳詩も同様に「一唱而三歎」が可能なのは明らかである。つまり遺山は、柳と謝とを比較した東坡の論を詩の前半で借用し、「一唱而三歎」と同様の典故を用いて後半部を構成したに他ならなかったのである。これは、東坡からの剽窃とこそいえ、遺山の炯眼ではない。

「意」を主體とする「近古」の論は、このように、古人の論、とりわけ宋人のそれを多く踏襲するものである。東坡や山谷からの影響に

つては、己に舊注の指摘する所もあり、ここでの詳述は避けるが、そもそもこの作品は、劈頭の第一首から、遺山の意識の中ではすでに基づく所があったであろう。「漢語魏什久しく紛紜」とは恐らく、李白『古風』第一首「大雅久しく作らず」の氣概を、彼なりに繼承し換言したものである。後に元好問は、「贈答楊煥然」(卷二)という詩の中で

詩亡又已久 詩亡びてまた已に久し

雅道不復陳 雅道 復に陳べず

といい、「別李周卿」詩(卷二)に於いて

風雅久不作 風雅 久しく作らず

日覺元氣死 日々 元氣の死なんとするを覺る

と述べた如く、李白の「意」と表現を繰り返し援用しては、自身の認識としていたからである。そして彼は、單に發想や着眼點のみならず、實に多くの表現を、様々な詩人から借用したのである。たとえば、第五首にいう「出門一笑大江橫」とは黃山谷「王充道送水仙花五十枝欣然會心爲之作詠」詩の一句であり、第八首にいう「論功若準平吳例 合着黃金鑄子昂」は、鄭繩「嘲范蠡」詩の表現を襲うものであった。また、第九首「布穀瀾翻」は東坡「戲用晁補之韻」詩、第十六首「岸夾桃花錦浪生」は李白「鸚鵡洲」詩や「東魯門泛舟」詩、第十八首「合在元龍百尺樓」は東坡「次韻答邦直子由」詩、第二十一首「縱橫正有凌雲筆」は杜甫「戲爲六絕句」、第二十二首「一波才動萬波隨」は「冷齋夜話」に記載する成句、第二十九首「可憐無補費精神」は『後山詩話』中の王安石の句を、それぞれ襲うものなのである。これらはすべて、誰の詩を論じるかを明示するために用いられたものではなく、言外の意を構成し、餘韻をそえる本歌として借用されたもので

であった。こうした遺山の手法から直ちに想起されるのは、無論、黃山谷のいう「換骨奪胎」の法である。また、「詩律に寛くして用事に博し」とされた東坡の手法でもあり、同時に、その東坡を學んで成らずとされた趙秉文の手法でもあった。元好問の方法とは、唐人の「意」と、宋人の手法を合して一にする點にあつたと見て、恐らく大過ないのである。

そして、遺山のこうした態度が、造語を愛用し、「前人の語を踏襲せず」とされたに李屏山一派の「變古」と、時に對立を見せたのもむしろ當然のなりゆきであつた。

萬古文章有坦途 萬古の文章 坦途有り

縱橫誰似玉川盧 縱橫 誰か玉川盧に似ん

眞書不入今人眼 眞書は今人の眼に入らず

兒輩從教鬼畫符 兒輩 従りて鬼畫符たらしめらる

この第十三首は、盧全の「險怪」を論じるものである。だが、李屏山とその一派が、「韓愈の變古」を標榜しながら周邊の小詩人の模倣に終始したことを念頭に置くならば、「今人」乃至「兒輩」の語が屏山一派を指したことは誰の目にも明らかである。この詩にいう「縱橫」とは、恐らく異端の意をこめるものであろう。「別に一路を轉じて」[變]を求める李屏山等は、儒に對する蘇張にあたるというのが、この詩の背後にある論理である。

また、「坦途有り」とは、盧全の覺醒の語として、韓愈「寄盧仝」詩にでもものであつたが、その韓愈について、元好問は次のような論を展開していたのである。

東野窮愁死不休 東野の窮愁 死すとも休まず

高天厚地一詩囚 高天厚地 一詩囚

江山萬古潮陽筆

合在元龍百尺樓

江山萬古 潮陽の筆
合に元龍百尺の樓に在るべし (第十八首)

この詩の後半は、已に施國那の指摘のある如く、黄山谷の次の評語を襲うと思われる。

子美の夔州に到りて後の詩と、退之の潮州より朝に還りて後の文とを觀れば、皆繩削に煩わされずして自ずから合す。(詩人玉屑)
山谷の評は、潮州より歸つて後の、しかも文をいうものであり、遣山の論と多少のずれはあるものの、後に遣山は、この山谷の評を用いながら

子美の夔州以後、樂天の香山以後、東坡の海南以後は、皆繩削に煩わされずして自ずから合す。(文集卷三十七 陶然集詩序)

と敷衍したのであり、その點から見ても、「潮陽の筆」と記述した彼の意識に、山谷の評語がなかつた筈はないと思われる(不煩繩削而自合)とは、韓愈「南陽樊紹述墓誌銘」にでる語でもあった。とすれば、詩にいう「江山萬古潮陽筆」とは、潮州以後の韓愈の、「繩削に煩わされずして自ずから合した」自然な筆致をいうものに他あるまい。遣山はここでも、李屏山の「變古の論」に與しなかつたのである。彼が韓愈を評價したのは、「變古」の故ではなく、「變古」の果に傳統的な自然に回歸し得たが故なのである(なお、この第十八首が、東坡「讀孟郊詩」にいう「要するに當に僧と清を闡わすべきも、未だ韓の豪なるに當るに足らず」を敷衍するものであったこと、すでに諸家の説く通りであろう。末句「合在元龍百尺樓」が同じく東坡の句を襲うものであってみれば、それは尙更である。また、この詩の前半が、孟郊をひき合いにしながら「聞道に陋」と評した蘇轍の論(注8参照)をも襲うものとするならば、詩の後半も、韓愈の「豪」のみならず「運命」をいうものとして解すべきかもしれない。いづれにしても、元

好問はここで、「創格」「創句法」と評される韓愈の一面よりも、建安の風骨の繼承者としての一面の方を強調しているのは、明らかである。

また、第二十三首では、同じく東坡と李屏山を意識しながら、次のように云う。

曲學虛荒小説欺

曲學虛荒 小説の欺

俳諧怒罵豈詩宜

俳諧怒罵 豈に詩に宜しからんや

今人合笑古人拙

今人 合に古人の拙きを笑うべけれど

除却雅言都不知

雅言を除却して都て知らず

この詩は、已に諸家の指摘のある如く、先ず何より、東坡の俳諧を批判するものであった。が同時に、東坡の「新」を愛し、その「變」を繼ごうとした李屏山の俳諧をも批判するものなのであって、そこに「今人」の眞意が隠されているように思われる。「歸潛志」卷九は、李屏山の俳諧について次のように記述する。

李屏山は、趙秉文を先輩として尊んだが、……文章の上では少しも遠慮せず、酔つてはよく趙を中傷した。趙秉文は怒ったが、手の施しようがなかつた。趙が西夏に刺史として赴いた折など、屏山は次のような詩を書いて餞贈とした。

百錢一匹絹 百錢 一匹の絹

留作寒儒棍 留めて寒儒の棍と作す

これは、趙が安易に墨跡を人に與えることを揶揄したものである。

また、李は次のような詩も書いた。

一婢醜如鬼 一婢 醜きこと鬼の如し

老脚不作溫 老脚して温すら作さず

これは趙の侍妾を揶揄したものである。

また、李屏山が古人を笑つた例としては、『中州集』に収める一連の

また、李屏山が古人を笑つた例としては、『中州集』に収める一連の

詠史詩があるだろう。ここでは、「老蘇」と題される次の例を示すとどめる。

宋季人憂大瓠穿 宋季 人 大瓠の穿たるるを憂い

敢留金幣不輸邊 敢て金幣を留めて邊に輸くわらず

權書更信蘇家策 『權書』 更に信ず蘇家の策

剩費青苗幾倍錢 剩費 青苗の幾倍の錢ならん

この時代は、俳諧や滑稽が愛好され、嘲諷的な詩を書いたのは李屏山のみではなかったが、「今人は合あはに古人の拙さだきを笑うべけれど、雅言を除却して都て知らず」という批判から直ちに想起されるのは、古人を笑い、造語を多用した李屏山の俳諧以外にない。

四

「論詩三十首」は、各首の論點を檢討しながら全體を見渡す時、そこにある種の偏向を感じざるを得ない作品である。たとえば、「吾は愛す、陶と韋と」(文集卷二「繼愚軒」)と、他の詩に於いてはしばしば傾倒を告白した韋應物について、彼は終に一言も論じなかつたし、白居易・王維・杜牧といった大詩人についても、この作品は一切論及しないのである。「論詩三十首」に於ける遺山の目的は、詩人の網羅になかつたと見て、先ず大過ない。一方、和韻・俳諧・狷介等の、どちらかといえは作詩態度に關わる問題について、彼はかなり熱心に論じているのであって、こうした事柄は、この作品全體の主題が、詩人論よりもむしろ作詩法・乃至作詩態度の方に大きく傾いていたことを、明瞭に示していると思われる。元好問は「小亨集引」(文集卷三「三十六」)という文章の中で、初學の折の自戒を十數箇條列挙しているが、「論詩三十首」の各詩の主題も、それら十數箇條と恐らく多くの重複部分をもつてであろう。

そのことは、すでに諸家の説があるから論及は避けるが、元好問が敢て屏山批判を展開したのも、正にこうした局面に於いてであった。

そして、作詩態度という面から見れば、元好問は、趙秉文に對しても、やはり批判的な立場に立つたと思われる。

闕靡誇多費覽觀 靡を闕い多を誇りて覽觀を費やす

陸文猶恨冗于潘 陸文 猶お潘より冗なるを恨む

心聲只要傳心了 心聲は只だ傳心してするを要すのみ

布穀瀾翻可是難 布穀の瀾翻 是れ難かる可けんや

この第九首は、陸機・潘岳に言及してはいるが、この二人を論じるものでは必ずしもない。論點はむしろ「費覽觀」と「心聲」の對照にあり、「用事」乃至「沿襲」と總括し得る問題に、この詩の焦點はあつたであろう。そして、第四句「布穀瀾翻」がここでも東坡の句を用いるものであつてみれば、批判の對象も、實際には宋人の詩法にあつたと見て大過ない。東坡・山谷の詩に用事・沿襲の多いことは周知のことであり、元好問は、その多用を、「心聲」をさまざま冗長さを招くものとして排除したのである。

ただ、ここで注意すべきは、用事・沿襲の多用が實は趙秉文の病弊でもあつた點である。「歸潛志」が、「趙の詩は多く古人の語を犯し、一篇に或いは數句あり、これまた文章の病」と記述し、李屏山が、「公の詩は往々にして李太白・白樂天の語あり」と批判したことは、すでに論及した。また、元好問も、「中州集」卷三の趙の小傳の中で、次のようにいっているのである。

五言大詩に至れば、則ち、沉鬱頓挫は阮嗣宗に學び、眞淳簡淡は陶淵明に學ぶ。它文を以て較ぶれば近からざるあり。

この「它文を以て較ぶれば、近からざるあり」とは、趙の「近古」の

實質がいかなるものだったかをいう、恐らく微言であろう。たとえば、趙の詩の一例を示せば、「摩詰の獨坐幽篁裏に傲なまう」と題された詩に、彼は次のようにいう(摺本文)。

獨坐幽林下 獨り坐す 幽林の下

談元復觀易 談元して 復た易を觀る

西日隱半峯 西日 半峯に隱れ

返照林間石 返照 林間の石

この詩は、確かに王維に酷似する。しかしそれは、王維の用語が羅列されたからに過ぎないことも、何ら論を待つものでない。また、もう一例示せば、「杏花」(摺本文)と題した詩に彼は次のようにいうのである。

香傳微雨隔簾櫳 香は微雨を傳わり 簾櫳を隔つ

十載航船不負公 十載の航船 公に負かず

また、

兩株副使鶯吟裏 兩株の副使 鶯吟の裏

一色新郎馬足中 一色の新郎 馬足の中

ここにいう「十載航船不負公」が杜牧「題禪院」詩をほとんどそのまま用いること、言う迄もない。また、「兩株副使鶯吟裏」という一句は王禹偁「春日雜興」詩を襲うものであり、「一色新郎馬足中」は、東坡「送蜀人張師厚赴殿試」詩と儲光羲「洛陽道」詩の兩詩を合して作りかえたものに他ならない。詠物詩が典故を多用するのは傳統的な習慣ではありながら、趙のこの詩は、種々の典故が何ら収斂を見せず、陳腐な羅列に終った駄作とって過言はない。

一方、用事・沿襲の多用は、これもすでに論及した如く、元好問自身(文集)の詩にも見られる事柄であった。たとえば彼は、同じく「杏花」(文集)

を詠じて次のようにいうのである。

畫眉盧女嬌無奈 畫眉の盧女 嬌として奈いかんともする無し

鬪齒孫娘笑不成 鬪齒の孫娘 笑い成らず

また

一般疎影黃昏月 一般の疎影 黃昏の月

獨愛寒梅恐未平 獨り寒梅のみを愛するは恐らく未だ平かならず

「盧女」とは梁の武帝「河中水歌」中の莫愁、「孫娘」とは「鬪齒の笑」で有名な梁冀の妻、また、「疎影黃昏月」とは林逋「山園小梅」詩を用いるものであった。ここには明らかに、趙と同じ態度があるといつてよい。二人は類似した詩論と類似した句法をもったわけだが、ただ、異なる点があったとすれば、それは、元好問の詩がより濃密な印象を與えることであろう。そして、元好問に好意的に云うならば、彼の詩の濃密さは、典故の集中度の高さと輪郭の鮮明さに起因するといつてよい。

趙秉文は、様々な詩人を模倣し、典故・沿襲の羅列を以て安易に詩を成したため、その詩の多くは散漫であった。それは恐らく、彼がいかに東坡を愛したかを物語る事柄でもあったろう。一方元好問は、詩情の濃厚な燃焼を愛した人であり、典故・沿襲も、自由瀾達のためではなく、もっぱら詩の凝縮のために用いられたのである。東坡同様、擴散を必ずしも畏れなかった趙と、それを「布穀瀾翻」とした遺山とは、その才能の違いを度外視しても、作詩態度にやはり相違はあった。そして、話を第九首にもどすならば、第九首のいう「心聲」とは、こうした二人の相違が正に端的に示されたものに他ならない。つまり「心聲」とは、遺山特有の唐詩的で濃密な詩情を指すのであって、彼は、用事・沿襲がその「心聲」にのみ奉仕すべきことを指摘したにす

ぎないのである。同じく趙秉文批判を行いなから、「守株の論」を展開した李屏山の素朴さと、元好問の議論が一線を畫し得るとすれば、それは恐らく、傳統に根ざした彼の、この平衡感覺によると見て間違いないだろう（なお、「心聲」と修辭法をめぐる問題については、「眼處心生、句自のずから神」とした第十一首でも同様にあつかわれており、この第九首とはほぼ同様の結論が導かれていることを、ここに附言しておく）。

そして、時代をリードした李屏山や趙秉文の詩が、後進のすぐれた才能によって乗り越えられ、詩壇全體が李杜を中心とする唐人の祖述へと流れを變えていったことは、元好問の作品のみならず、『歸潛志』卷八の次の記述によっても、ある程度確認し得る。

趙閑閑は晩年、詩は多く唐人の李杜諸公に法る。然れども未だ嘗て人に語らず。已にして麻知幾・李長源・元裕之の畫鼎出ず。故に後進の詩を作す者は、争いて唐人を以て法と爲す。

ここにいう「未だ嘗て人に語らず」とは、恐らく劉昫の微言である。詩法とは、人に語らずとも詩を見れば明らかなるものである。それをこのように表現したのは、元好問等の登場以後、實際には彼等三人が詩壇をリードし、趙の政治力を背景に當時の詩風を變えていったことをいうためであろう。「論詩三十首」は、そうした轉回點にあって、時代の潮流を決定付けた作品であり、この作品の最大の功績もそこにあると見てよい。

ただ、忘れてならないのは、元好問が實に多くを、東坡をはじめとする宋人に負っていた點である。彼は、第二十二首で「只だ知る詩は蘇黃に到りて盡きたりと」といい、東坡・山谷の出現がいかに困難な狀況をもたらしたか、正確な認識を示したのである。また、第二十六首では、次のようにも云う。

金入洪爐不厭頻 金は洪爐に入るも 頻を厭わず
精眞那計受纖塵 精眞 那の計ぞ纖塵を受けん
蘇門果有忠臣在 蘇門 果して忠臣の在る有らば
肯放坡詩百態新 肯て坡詩の百態の新を放にせん

この詩で遺山は、東坡の詩の鍛えられた純粹さが「百態の新」を生んだこと、そしてそれが蘇門の誰にも凌駕し得なかったことを極めて高く評價したのである。元好問の目標は必ずしも「新」にはなかったが、彼の詩業の生涯の課題は、東坡の後を繼ぎ、東坡の中にある「近古」を自ら達成することであった。そして、「詩は東坡に至りてすら且つ近古たる能わずの恨みあり、後人の望む所無し」と記述した遺山が、晩年に作詩法を論じて述べたのは、次のような言葉だったのである。

方外の學に、道を爲すは日々損すの説あり。また、學は無學に至るの説あり。……技の、道に進む者のみこれを能くするに非ざるか。

（文集卷三十七
陶然集詩序）

ここに遺山がいうのも、禪に傾倒した東坡等の説のひき寫しに他ならなかった。元好問は、江西詩派には終生冷淡であったが、才能の違いを別にすれば、江西詩派の群小詩人達と彼とは意外に近い位置にあったといつてよい。

元好問は、「論詩三十首」第二十九首で、陳師道を次のように擲揄している。

傳語閉門陳正字 閉門の陳正字に傳語せん

可憐無補費精神 「憐むべし 無補に精神を費やせしを」と

これは、『後山詩話』に記述する、次のような韓愈批判を踏まえての表現である。

荆公の詩に云わく、「力めて陳言を去り末俗を誇る。憐む可し、無補に精神を費やせしを」と。而れども、公の文體はしばしば變じ、暮年、詩は益々苦し。故に知る、言は慎しまざる可からずと。

つまり遺山は、「慎しまざる可からず」とした陳師道を、當の王安石の句を用いて揶揄したというわけである。だが我々は、同じ句を以て更に元好問を皮肉ることも、強ち不可能ではない。彼は第二十八首に於いて「未だ江西社里の人とは作らじ」と述べながら、詩論と作詩法に於いては、江西詩派の範圍を出たようあまり思えないからである。

注

- (1) 『歸潛志』卷八は、詩會に於いて〈野菊〉という題が出されたことを記述し、あわせて趙秉文「岡斷秋光隔 河明月影交……」の句を掲載する。〈野菊〉と題される詩は、『遺山文集』卷八と卷九に二首みえ、ともに「座主閑公の命にて作る」との副題がある。この二首は、たとえは卷八のそれが「柴桑人去已千年 細菊斑斑也自圓」という如く、ともに和韻の作ではなく、「再び座主閑公の命を奉じて作る」と題された卷九のそれは、卷八の作と更に異つた韻が用いられているのである。また、同様のことを示す例は、『中州集』中の諸人の詩と遺山の詩とを仔細に検討すれば枚擧げにいとまがない。更に、有名な「學東坡移居八首」(卷二)や「飯酒」(卷二)なども、もし當の東坡が作れば必ずや次韻の作としたのであつて、こうした事柄のすべては、遺山がいかに自由に韻を設定したかを如實に物語っているのである。また、このことから逆に謂えば、前掲の「九日讀書山」詩が元好問にとっていかに特殊で、また重要な作品であつたか、論を待つまでもないものがある。

(2) 『歸潛志』卷八に次のような記述がある。「凡作詩、和韻爲難。古人贈

答皆以不拘韻字。迨宋蘇黃、凡唱和、須用元韻、往返數週以出奇。余先子頗留意、故每與人唱和、韻益狹、語益工、人多稱之。嘗與雷希顔・元裕之論詩、元云「和韻非古、要爲勉強」。先子云「如能以彼韻就我意何如、亦一奇也。……」また、この記述からも、和韻の是非が當時の詩壇の關心事であつたことがわかる。

(3) 注(2)参照。

(4) 原文は「活潑刺底」。當時の俗語では、「活潑刺」と、形容詞に「刺(la)」の付くことはよくあり、元曲にも多くの用例がある。

(5) 原文は「詩只一向去也」。「一向」とは當時の俗語で、「一味」乃至「一意」の意(『詩詞曲語辭匯釋』参照)。なお、この部分は、一本に「詩只一句去也」と作るが、誤りであろう。

(6) 王夫之『船山遺書』卷六十四「夕堂永日緒論」参照。

(7) 王若虛『滹南遺老集』卷二十七「臣事實辨」には次の文章があり、この二句と恐らく深い關わりがある。「管寧華歆、共鋤園菜、見地有金。寧揮鋤、與瓦石不異。歆捉而擲之。世皆優寧而劣歆。予謂、以心術觀之、固如世之所論。至其不近人情、不盡物理、則相去亦無幾矣。畢竟金玉與瓦石、豈無別者哉。此莊列之徒、自以爲達、而好名之士、聞風而悅之者也。若夫君子之正論、則不然。貴賤輕重、未嘗不與人同。特取舍之際、有義存焉耳」。元好問と王若虛と、どちらが先にこうした論を展開したかは明らかでないが、ここには、遺山の第十四首とほぼ同様の立場からの記述があるといつてよい。

(8) 蘇轍は、孟郊を論しながら次のようにいう。「唐人工於爲詩、而陋於聞道」(『詩人玉屑』卷十五)。なお、この語を、元好問は陸龜蒙を論じた「校笠澤叢書後記」(文集卷三十四)の中で「宋儒爲唐人工于文章而昧于聞道」と引用し、「獨り龜蒙のみにあらず」とした。

(9) 注(8)参照。なお、陸龜蒙を論じた文章は、宋人にはほとんど見えない。嘗ては遺山の編纂になると考えられた『唐詩鼓吹』が陸詩を多く收

録するのは、この場合非常に興味深い(三十二首)。因みに、金朝人が唐詩を考える上で常に意識した『唐百家詩選』は、陸詩を一首も収録しない。また、遺山の同時代人が陸に言及した例は数例あり、こうした事柄は、陸龜蒙という詩人がこの時代に發掘されたことを意味するように思われる。

(10) 『禮記』「樂記」の當該箇所は、「清廟之瑟，朱絃而疏越，壹唱而三歎，有遺音在」。なお、白居易はこの「朱絃」を「五絃彈」詩の中で、「正始之音其若何 朱絃疏越清廟歌」と用いている。この詩の「朱絃」に、「近古」の意が托されているのは明らかである。

(11) 「可憐無補費精神」の一句は、韓愈「贈崔立之評事」詩中(文集卷四)の「可憐無益費精神」に本来出るものである。遺山のこの句は、後に多少言及するように、二重三重の皮肉をもつ。

(12) 方回『桐江集』卷三「劉光詩跋」参照。

(13) 『甌北詩話』卷三参照。

(14) 韓愈「薦士」詩参照。なお、この「薦士」詩は、「論詩三十首」第八首とも深い関わりがあり、後世に與えた韓愈の影響を考える上で、重要な作品である。

(15) 遺山は、他に「別李周卿」詩(卷二)の中でも「中間陶與謝、下逮韋柳止」と述べているが、彼のこうした詩句が、東坡の、たとえば「却愛韋郎五字新」(「和孔周翰二絶」第二首)などを意識してのものであること、言う迄もない。

(16) 「兩株桃杏映籬斜 裝點商州副使家 何事春風容不得 和鶯吹折數枝花」

(17) 「……一色杏花三十里 新郎君去馬如飛」

(18) 「……朝看大道上 落花亂馬足」

(19) 小栗英一氏注『元好問』(岩波書店・中國詩人選・14頁)参照。

(20) 注(11)参照。王安石は本来、韓愈の句を以て韓愈を揶揄したのである。